TOKUSHUKAI Medical Assistance Team TMAT Non-Profit Organization

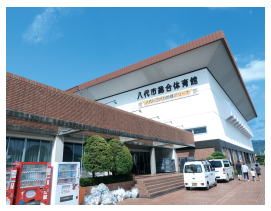
国内外の相次ぐ巨大地震に隊員派遣

ベネズエラ地震＆令和8年熊本地震で医療活動

国内外の被災地で災害医療支援活動を行うNPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）は、今夏、巨大地震が発生したベネズエラと熊本に相次いで隊員を派遣した。ベネズエラでは日本時間6月25日午前7時頃に北部カリブ海沿岸のモロン周辺を震源とするマグニチュード7超の連続巨大地震があり、多くの建物が倒壊、死者6,000人超の甚大な被害が発生した。先遣隊と本隊を派遣し、現地医療機関や他の支援チームと連携して懸命に診療にあたった。7月28日には熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード7.1の巨大地震が発生、多くの被災者の方々が避難所に身を寄せた。TMATは多数の支援団体と協働し、大規模避難所を拠点に診療や環境整備など多岐にわたる活動に取り組んだ。発災当日に先遣隊を派遣し、リレー形式で本隊第5陣まで計56人が8月30日まで34日間にわたり、切れ目なく活動した。


夜間の緊急受診にも医師、看護師、薬剤師が対応


患者さんの容態に応じTMAT緊急車両で救急搬送も


TMATが活動拠点とした八代トヨオカ地建アリーナ


DMAT本部を訪れたり八代市地域保健医療福祉調整本部会議に連日参加したりし、関係機関と密に連携

「関節が痛んだりはしていませんか」――。令和8年熊本地震の先遣隊メンバーである町田崇医師（福岡徳洲会病院救急科医員）が優しく語りかけた。相手は、TMATが活動拠点とした八代市にある大規模避難所「八代トヨオカ地建アリーナ」の一角に設けた救護所を訪れた避難者さんだ。

7月30日、時刻は午後3時半。この直前、本隊第1陣が同アリーナに到着し、先遣隊および先行して到着していた本隊宇治チームと合流。情報共有と今後の方針を話し合うため、計15人の隊員がそろって全体ミーティングを行ったばかりだった。

この避難者さんは地震発生時に落下物に当たった衝撃により、脚や臀部などに痣ができていた。町田医師は避難者さんの声に耳を傾けながら、「痣は徐々に色が変わり良くなっていきます。時間が経つのを待つしかありませんが、痛みが強いのでしたら痛み止めの薬を使いながら様子を見ていきましょう」と治療方針を伝えた。

救護所の外に並べたパイプいすには、順番待ちをしている方々の姿があり、その後も途切れることなく創傷、裂傷、骨折、打撲、腰痛、身体のこわばり、便秘、下痢症状などを訴える患者さんの診療を、看護師や薬剤師の隊員とともに続けた。途中、町田医師から第1陣の伊藤真之介医師（宇治徳洲会病院総合診療科医員）にバトンタッチ。

第1陣の合流で診療体制が拡充したため、夕診の開始を決定し、この日は第1陣リーダーの合田祥悟医師（札幌東徳洲会病院集中治療センター副センター長）が担当して診療に尽力した。夜間に重度の脱水症状を疑う患者さんの受診があり、地域の拠点病院である熊本労災病院に救急搬送を行う場面もあった。


他の支援団体やボランティアの方々と協力し、ダンボールベッドを設営


避難所（アリーナ）支援の関係者が一堂に会して情報・課題などを共有


じほうの田中士郎メディファクス編集長（写真中央）の密着取材や、エムスリーの取材にも対応

令和8年熊本地震 支援活動の動き

7月28日	午後4時27分頃、熊本県熊本地方を震源とするマグニチュード7.1の巨大地震が発生。直後から事務局が情報収集を開始し、午後7時頃、先遣隊の派遣決定。福岡徳洲会病院の緊急車両（ドクターカー）で3人が現地へ出発。午後11時頃、被災状況・医療ニーズの拡大を見越し、7月30日の合流に向けて後続隊・本隊の派遣調整を開始
7月29日	午前2時～6時、八代市役所・氷川町役場を訪問。避難所調査を実施し八代市立第二中学校で軽傷外科患者2人を診察。午前9時、八代市役所より許可を受け「八代トヨオカ地建アリーナ」を活動拠点として決定し、救護所開設し診療開始、15人を診療。同日、ライフラインが停止した鏡クリニックへ大隅鹿屋病院から隊員を緊急派遣。外来透析患者17人の受け入れ先の調整を完了
7月30日	午前8時15分、宇治徳洲会病院チーム（5名）が合流。後3時10分、本隊第1陣（7人）が合流。八代市太田郷・氷川町の避難所を巡回。56人を診療
7月31日	近隣医療機関・薬局マッピング作成。支援物資の大規模荷下ろし・配給支援。JMAT・JRAT連携で福祉用具導入。68人を診療
8月1日	鏡クリニックの書類整理・資材補給、希望の里たいようへの往診。アリーナ内の区画整理（ゾーニング）を実施。26人を診療
8月2日	日本赤十字社・ボランティア・中学生と協働しダンボールベッドを設営・要配慮者を誘導。モバイルファーマシー（福岡県薬剤師会など）が到着。32人を診療
8月3日	多団体合同でダンボールベッド計280床設置完了。多目的室を感染症隔離部屋に改修。36人を診療
8月4日	シャワー案内、手指消毒液・ハンドソープ配置、マナーポスター掲示。32人を診療
8月5日	本隊第2陣（10人）が合流。第1陣・宇治チームが活動終了。JRAT連携による手すり設置・安眠セット配布。18人を診療
8月6日	日赤と合同で八代二中へ巡回診療。JRATと協力し身体活動維持の定時ラジオ体操開始。24人を診療（うち巡回5人）
8月7日	弾性ストッキング配布・DVTチェッククラウンド実施。23人を診療（うち巡回2人）
8月8日	発熱者増加受け、隔離スペース確保・ゾーニング実施。JRATと協働で手すり設置、日赤小児科チームと避難所巡回。30人を診療
8月9日	DICT協働で発熱診療動線見直し、感染対応スペース拡張。周辺避難所・希望の里たいよう巡回。19人を診療
8月10日	感染症対策として嘔吐物処理スピルキットを作成・配備
8月11日	本隊第3陣（12名）到着、第2陣が活動終了。20人診療
8月12日	モバイルファーマシー閉局。15人を診療
8月13日	TMAT診療室横に「お薬相談ブース」開設
8月14日	薬剤師会と常備薬・服薬困りごと調査実施。八代二中避難所巡回。14人を診療（うち3人巡回）。
8月15日	DVTチームラウンド、常備薬調査完了。八代二中・希望の里たいようを巡回。21人を診療
8月16日	氷川町役場や八代二中などを訪問し状況確認。ベット同伴エリア・段ボールベッド周辺の清掃。20人診療
8月17日	本隊第4陣（9名）合流、第3陣が活動終了。DWAT、八代市と要支援者対応を協議。5人を診療
8月18日	要配慮者スクリーニングを実施し、熊本南病院と共有。8月19日で午前診療を終了し、20日をもって救護所での通常診療を終了予定である旨を周知。3人を診療
8月19日	熊本南病院・DICT・八代市への要支援者・感染対応・薬剤管理の引き継ぎ資料を作成。手指衛生ポスターを作成。2人を診療
8月20日	20日をもって救護所での通常診療をすべて終了。要支援者データを整理。二中・希望の里たいよう巡回。2人を診療
8月21日	通常診療終了に伴い有事対応体制へ完全移行。アリーナ内巡回・聞き取りにより避難者状況把握カードを作成・データ化し市へ共有
8月22日	当直体制からオンコール体制へ移行。「夏祭り・健康チェック」を開催
8月23日	本隊第5陣（7人）合流。第4陣が活動終了。希望の里たいよう・八代二中を巡回訪問し支援ニーズ確認
8月24日	依頼に基づきYMCA職員へ日赤と協働しBLS（一次救命処置）講習を実施
8月25日	DICTと連携しマスク着用・手指消毒啓発を強化。JMAT（日本医師会災害医療チーム）・JRATなどと連携し福祉用具を導入。希望の里たいよう訪問
8月26日	感染症対策のため手指消毒剤設置場所の見直しを実施
8月27日	アリーナ窓際に呼吸器症状者用簡易テント4基設置・運用ルール作成
8月28日	日赤救護班と共同健康チェック実施、避難者情報・マップ更新。希望の里たいよう健康相談実施。呼吸器症状者用テントの案内ポスター掲示
8月29日	全体ミーティング（TMAT、YMCA、日赤、DWAT、八代市役所職員が参加）に出席し、30日に活動終了する旨を周知し、熊本南病院を含む引き継ぎ団体に申し送りを実施
8月30日	現地での災害医療活動を終了

24時間診療・当直体制を構築 環境整備など幅広い活動展開

TMATは地震発生から間もない7月28日午後7時頃、先遣隊の派遣を直ちに決定。福岡病院の緊急車両で4人が被災地へと向かった。夜を徹して八代市役所災害対策本部を訪問し、八代市・氷川町の避難所アセスメント（評価）を行って医療ニーズなど調査。同本部の許可を得て、翌29日午前9時頃には八代トヨオカ地建アリーナを活動拠点とすることを決定し、9時半から早速診療を開始した。

また、インフラが停止し透析実施が困難となった八代市内にある徳洲会グループの鏡クリニックに対し、29日に大隅鹿屋病院（鹿児島県）から隊員を緊急派遣。他医療機関への透析患者さんの受け入れ調整を行った。

本隊第1陣の合流にともなってTMATは救護所での24時間診療・当直体制を確立。発災直後の創傷や骨折といった急性外傷の処置や救急患者対応・搬送に追われる一方、避難生活の長期化を見据えた環境整備にも早期から着手、日本赤十字社や地元ボランティア、中学生らと協力し、アリーナ内に計280床におよぶダンボールベッドを設営。

また、要配慮者のスクリーニング（拾い上げ）やアセスメントを行い、福祉避難所への移送、同避難所への往診も実施。アリーナ内に要配慮者向けの福祉スペースや、感染症対策の隔離スペースを設定するなど区画整理（ゾーニング）にも取り組んだ。大量に届く支援物資の搬入作業や清掃、食糧配給のサポートなど幅広い避難所支援も実践。こうした取り組みと並行して八代市・氷川町にある周辺避難所の調査や巡回診療を行った。深部静脈血栓症（DVT）予防のエコー検査、弾性ストッキング配布、ラジオ体操なども実施した。

救護所での診療については8月20日に終了し、有事対応を行う体制へと移行。その後、現地では地元の病院やクリニックが再開し始め、避難所の医療ニーズの低下をふまえ、八代市や引き続き現地で活動する支援機関への確実な引き継ぎを完遂し、30日をもってTMATは活動を終了。34日間、先遣隊から本隊第5陣まで56人を派遣し、延べ501人の傷病者の診療を行った。

ベネズエラ地震 支援活動の動き

6月24日	午後6時頃（日本時間25日午前7時頃）、ベネズエラでマグニチュード7超の連続巨大地震が発生。情報収集を開始
6月29日	先遣隊3人の派遣を決定。成田空港から9時半に出国（メキシコ経由）
6月30日	アルトゥーロ・ミチェレナ国際空港に到着。現地協力者手配の車両でカラカスへ移動（約4時間）。JDR（国際緊急援助隊）と合流し情報交換。被災地通行許可の登録を実施
7月1日	カラカス市内の被害状況視察。シモン・ボリバル国際空港にてRDC（受入・出発センター）登録。CICOM（医療情報・調整セル）訪問。カラバレダ地区を視察。PWJと情報交換
7月2日	CICOMでベネズエラ保健省より正式な活動許可を受領。Domingo Luciani病院での支援についてJDRと打ち合わせ実施
7月3日	Domingo Luciani病院で病院幹部・JDR・TMATの3者調整会議。PWJ拠点訪問。午後から同院救急外来（ER）でTMAT医療支援を開始
7月4日	Domingo Luciani病院ERでの診療支援を継続
7月5日	病院駐車場にJDRと共同で仮設診療所を設営し診療開始。複数人を診療
7月6日	仮設診療所で受付トリアージ（初回問診・緊急度判定）を担当。JDRとの協働診療活動を実施。数十人のトリアージ・診療を実施
7月7日	在ベネズエラ日本大使館を表敬訪問。PWJの活動拠点視察。他地域の被害調査実施
7月8日	先遣隊が現地を出発し帰国の途に就く
7月19日	本隊4人の派遣を決定。成田空港を出発し、メキシコ・パナマ経由で移動
7月20日	パナマからバレンシア空港へ到着。空港RDCにて登録票（PASS）受領後、CICOM訪問。夜、PWJと合同ミーティング
7月21日	ラ・グアイラ州の避難所キャンプ隣接地にPWJと共同で仮設診療所を設営。内科疾患などを中心に診療を実施。約20人診療
7月22日	ラ・グアイラ州の施設でPWJと協働で診療。夕方、地元の救助医療チーム「Los Rescatistas de La Guaira」と協議。約30人診療
7月23日	ラ・グアイラ州の公園でPWJと協働で仮設診療所を設営・診療。避難生活にともなう慢性内科疾患、軽症外傷、精神的ショック（心的ストレス）などに対応。約20人診療
7月24日	Domingo Luciani病院を訪問し事務次長と会談。ER・手術室・重症外傷エリア（トラウマエリア）を視察し翌日の巡回診療への同行を決定。午後データ整理、および、CICOMからカラバレダ地区の避難所診療の要請があり、同院との調整を行った
7月25日	Domingo Luciani病院医療チームによるカラバレダ地区避難所キャンプへの巡回診療に同行・サポート。病院チームと協働し約50人診療
7月26日	午前中、診療データ・活動報告レポートを取りまとめ。午後0時半にCICOMを訪問し活動報告書を提出。JDR医療チームを訪問し情報交換
7月27日	本隊がベネズエラを出発。活動を終了

ベネズエラでは病院や仮設診療所拠点とし避難所に巡回診療も行う


ラ・グアイラ州の避難所キャンプに開設した仮設診療所で診療


ベネズエラの現地医療チームと巡回診療を実施

南米ベネズエラ北部で6月24日に巨大地震が発生。直後からTMATは情報収集を続け、29日、村田宇謙医師（湘南鎌倉総合病院救急総合外科部長）ら先遣隊3人を派遣した。翌30日（現地時間）にベネズエラに到着後、首都カラカス近郊や被害の甚大な沿岸部ラ・グアイラ州などで被災状況の調査や医療ニーズのアセスメントを実施。

現地では国際緊急援助隊（JDR）やベネズエラ当局のCICOM（医療情報・調整セル）と密に連携し、拠点病院であるカラカス市内のドミンゴ・ルシアーニ病院の救急外来での診療やトリアージ（重症度・緊急度選別）を実施、駐車場に設置した仮設診療所でも診療にあたった。救急外来では搬送患者さんや急患への対応にあたり、診察や処置など診療支援を実施。仮設診療所では内科疾患の患者さんへの対応が多かった。

7日まで活動した先遣隊に続き、中山文彦医師（東京西徳洲会病院外科部長）ら4人からなる本隊を19日に派遣。日本のNGOであるピースウィンズ・ジャパン（PWJ）や現地の医療チームと協働し、ラ・グアイラ州にある避難所キャンプに仮設診療所を設営して診療を行ったり、ドミンゴ・ルシアーニ病院の医療スタッフとともに同州内の避難所キャンプへの巡回診療を行ったりした。

避難生活にともなう内科疾患や環境変化による体調不良が多く見られた。現地の医療機関が業務を再開し、災害に起因する疾患が減少していることをふまえ26日（現地時間）に活動を終了した。先遣隊と本隊で計120人超に診療を行った。